予告された殺人の記録

by Nobuyasu Takahara

高原伸安 DEATH TRAP

126799

予告された殺人の記録

一九九一年九月五日第一刷発行

KODANSHA NOVELS

定価はカバーに表示してあります

著者—高原伸安 © 1991 NOBUYASU TAKAHARA Printed in Japan

発行者—野間佐和子

発行所—株式会社講談社

東京都文京区音羽二-一二-二一 郵便番号一一二-〇一

編集部〇三-五三九五-三五〇六
販売部〇三-五三九五-三六二六
製作部〇三-五三九五-三六一五

印刷所—信毎書籍印刷株式会社 製本所—株式会社堅省堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。

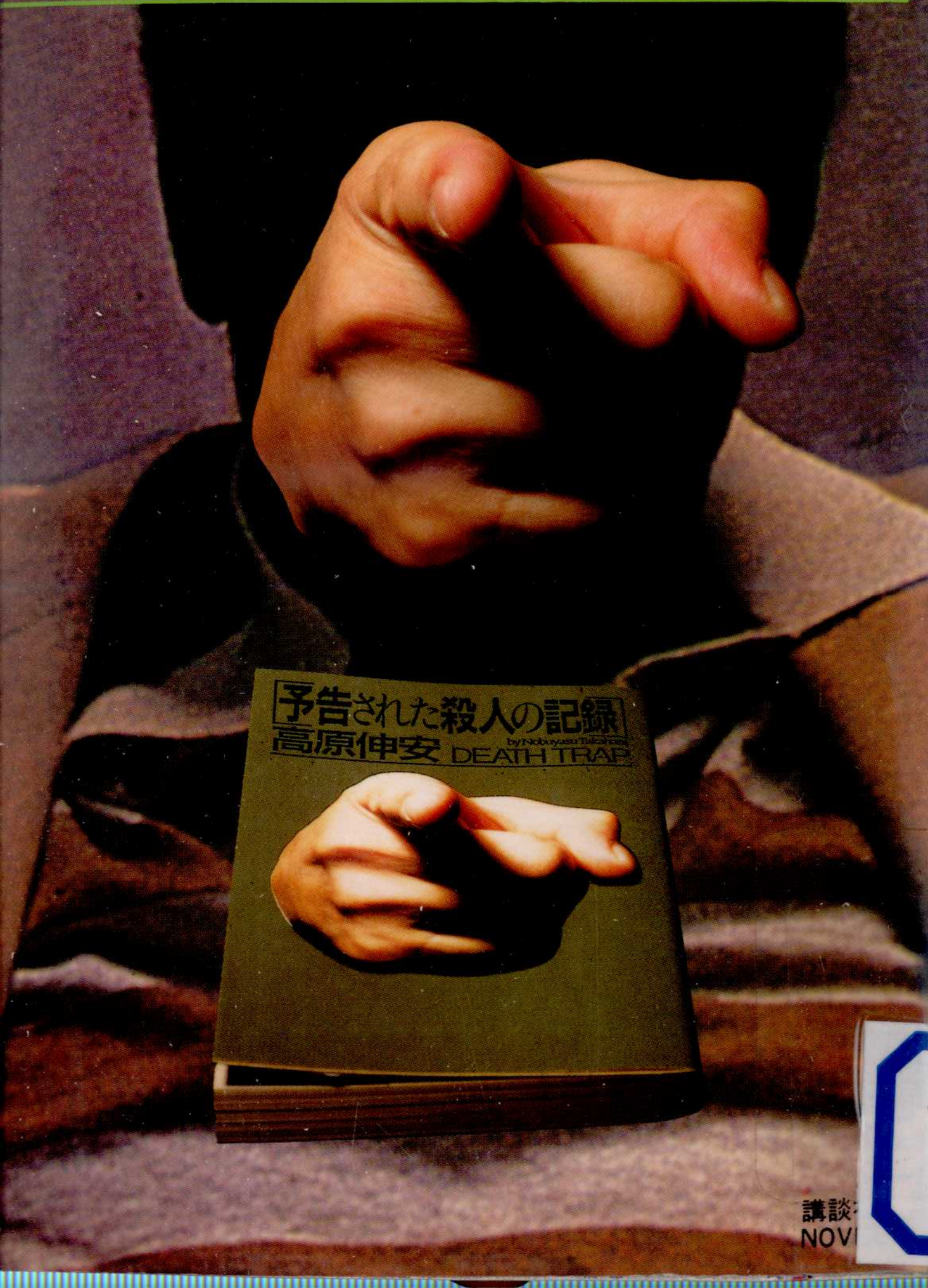
ISBN4-06-181577-6（文三）

¥720-

予告された殺人の記録

by Nobuyasu Takahara

高原伸安 DEATH TRAP



講談
NOV

81577-6 C0293 P720E (0)
定価720円(本体699円)

高原伸安
(たかはら・のぶやす)

昭和32年生まれ。岡山大学法学部経済学科卒。現在、岡山県庁職員。小学校3年生の時のIQが170。IQ170といえば湾岸戦争で一躍有名人となった、かのシュワルツコフ司令官と同じである。
好きな作家は、アガサ・クリスティ、ディクソン・カー、横溝正史、仁木悦子。
好きな歴史上の人物は、諸葛孔明。

ダイイングメッセージは華麗なカトレアの花……。ロサンジェルスの高級住宅街で起こった殺人事件は、密室で自殺した男の犯行なのか。物言わぬ花はいったい何を告げるのか。事件に巻きこまれた〝私〟の推理行は、ありうべからざる犯人の名前を指し示す。ミステリー最後の放れ業に挑戦した驚天動地の大異色作。

予告された殺人の記録

原伸安

講談社ノベルス

ODANSHA NOVELS

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

—FOR YOU

ブックデザイン＝熊谷博人
カバーデザイン＝辰巳四郎

主な登場人物

平田一郎――この物語の主人公。心理学者
黒崎　徹――〝私〟の助手。心理学者
加藤順子――同
リチャード・オッペンハイマー――〝私〟の恩師。心理学教授
間宮由美――〝私〟がニューヨークで知り合った女性
村田香織――〝私〟の元恋人
トーマス・チャップマン――オッペンハイマー家の隣人。コンピューター会社社長
メイビル・チャップマン――トーマスの妻
ピーター・レッドフォード――トーマスの秘書
トム・ギャビン――メイビルの愛人。テレビ俳優
J・B・オコーネル――ボウイ&オコーネル探偵社の経営者
ロバート・ボウイ――同
レジー・ジョンソン――J・Bの友人
吉岡　浩――オッペンハイマー家の隣人。宝石商
吉岡加世子――浩の妻
吉岡紀子――浩の長女
スタンフォード夫妻――オッペンハイマー家の隣人

――世界と生とは一つである――

ウィトゲンシュタイン

私はこの事件を振り返るたびに、すべての発端となったある光景（イメージ）を思い浮かべる。

ロサンジェルス。ある雨の日の早朝。風に飛ばされたピンクの帽子を追いかけて、若い女性が道路にとび出して来る。

猛スピードで走ってきた金色のリンカーン・コンチネンタルが彼女をはね飛ばし、急ブレーキをかけて止まる。真っ赤な傘が道路を転がって行く。

運転していた男と助手席の男が、車から出てきて、倒れている女性を覗き込む。彼女の脈を取ってみた助手席の男が、青ざめて立っている男を見て首を振る。

気がつくと、そばに目撃者が身動きもできないで立っていた。他には誰もいない。

そこで、運転していた男と助手席の男は……。

この夢の種子は、まるで悪夢のように私の日常生活の中で頭をもたげてくる。

1

――あなたが犯人だ！――

と、いまショー・ウインドウの中のテレビでは名探偵が犯人を指摘していた。ミステリーではおきまりの台詞である。

私は、それを横目で見ながら通り過ぎ、ニューヨーク近代美術館の中に入った。

この美術館は一九二九年にでき一九六四年に改築されたということだが、モダンな建物で私が気に入っている場所のひとつだった。マンハッタンのど真中にあるので、静寂というところまではいかない。しかし、中町の雑踏から内部に入って来ると、まるで別世界へ迷い込んだような錯覚が生じる。

私は、ルソー、モネ、セザンヌ、ドガ、スーラ等の作品を順番に鑑賞して歩いていた。

お上りさんらしい、カメラを持った日本人の姿もちらほら見える。

ピカソの『鏡の前の少女』の前で、日本人の新婚夫婦といった風情の男女が、楽しそうに絵を眺めていた。

その絵は鏡の前の少女と鏡の中の少女との対応をキュビズムの完成された筆致によって表現した作品である。強く太い線と明るい原色を使って、円や楕円を中心とした構図を取り、少女がまるで太陽の女神のような印象を与えている。

「こんな女性とは、結婚したくないなあ」

新郎らしい背の高い男が言う。なかなかハンサムで、さわやかな青年だった。手にはカタログを持っていた。

「でも、この女の人も世界で指折りの美人には違いないじゃない」

連れの若い女性が答えた。髪の長い、目鼻立ちがはっきりした美人である。黒い髪と白いスーツが対照的で感じがよかった。

私は絵を見ているふりをしながら、チラチラとこの似合いの二人を観察した。
「そりゃあ、何億円かの価値のある美女には違いないけど、君の価値は、ぼくには測れないよ」
化粧をしないでも美しい顔がピンク色に染まる。男の大げさな言葉にはにかみながらも、満更でもない様子だ。
「それに、この女性とはセックスするのが大変だな。アクロバッティックな姿勢をしなきゃならない」
「もう、ほんとにいやらしいんだから」
若い女は、軽くぶつ真似をした。その仕草は初々しくて可愛かった。
「だけど、そんなぼくが好きなんだろ」
「……」
女は黙ってうつむいてしまった。
やがて、この白い色の服で統一したカップルは部屋を出て行った。

私は自分を見つめている視線を感じた。しかし、そちらの方へ目をやると、もうその感じは消えていた。
そこには、おしゃべりに夢中になっているアメリカ人らしい家族連れと、絵を熱心に見ている若い女性しかいなかった。
私は、ダリの『記憶の固執』の前に行った。
これは、ダリの作品中最も人気のあるもので、ホット・ケーキみたいにグニャリとした三つの時計の絵である。テーブルの上の赤っぽい小さな時計には蟻が群がり、遠くにはダリお得意の崖と水平線が見える。
ここでは、黒人の少年達が話をしていた。
何だか、以前にも目にしたような光景である。
「こんな時計をポケットに入れておいたら、たちまち蟻に食べられちゃうな」
「ほんとうだ。ハンバーガーなんか食べに行けないよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

私は、このチョコレート色をした少年達の横で絵を眺めていたが、またもや誰かに見られている気がした。

何気なく振り向くと、今度は視線が合った。

その瞬間、私は稲妻に打たれたように立ちすくんだ。甘い顔立ちに、たおやかな身体つきの女性が、そこにいた。やさしい瞳、形のいい鼻、思わずキスしたくなるような口唇、少しカールさせたショートヘアー、どこを取っても私の感覚に強く訴えてこないところはなかった。すらりとした身体のサイズは日本女性の標準を少しばかり上回っているようだ。年齢は二十歳を少し過ぎたといったところだろうか。水玉のミニのワンピースが、よく似合っている。顔は見えなかったが、さっき後ろを向いて絵を眺めていた女性に違いない。

私はまるで思春期の少年のように、心臓をドキドキさせていた。こんな気持ちになったのは、初めての経験だった。

気分を落ち着かせるために、絵の方に向き直ったが、もう絵を見てはいなかった。私の網膜には、この女性の容姿が鮮かに焼き付いていた。

私が緊張を解くと、すぐに彼女の方も絵の鑑賞に戻っていった。それだけは、しっかりと視線の隅で捕えていた。

何秒そのままの姿勢を続けていたかわからないが、私はついに我慢ができなくなって、チラリと彼女を見た。

また、視線が合った。これはいい徴候だろう。

異国の地で、同じ日本人に出会った気易さからか、彼女は私に微笑みかけてきた。

とてもあどけなく、それでいてどこかコケティッシュな笑顔だった。

少し躊躇したが、すぐに決心した。このままチャンスを逃がしたら、この美人とは永遠のお別れになってしまう……。

私はその笑顔に励まされて、彼女のそばまでゆっ

くりと歩いていき、声を掛けた。
「こんにちは。ご一緒してもかまいませんか？」
たぶん、傍から見れば私の様子は、初な青年がダンス・パーティーで女の子に声を掛けるみたいにぎこちないものだったに違いない。
それでも、彼女は、「喜んで――」と答えてくれた。
それが、彼女の声を耳にした最初だった。
その声は、心地よく、少し鼻にかかったような響きを持っていた。
「以前にお会いしたことがありますか？」
私はゆっくり訊いた。
「いいえ。たぶん初めてだと思いますけど……」
「そうですか。どこかのパーティーかなにかで、見掛けたような記憶があるのですが……。気のせいかな？」
「もしかしたら、そうかもしれませんね」
彼女は、女らしい思いやりをみせてくれた。
私達は、シャガール、クレー、ブラックなどの絵を見て歩きながら、自己紹介をした。
彼女の名前は間宮由美、年齢は二十三歳で、花嫁修業中だということだった。アメリカには、大学時代に知り合った友達がいまロサンジェルスにいるので、遊びかたがたやって来たらしい。この夏は、ずっとこちらで過ごすそうである。
私達は二階に降り、マティスの『ピアノの稽古』のところまで来ていた。
この絵は、男の子が開け放たれた大きな窓を背にしてピアノのレッスンを受けている姿を表わしたもので、少年の右上と左下には女性が二人描かれている。おそらく右上の女性は家事をしている母親で、左下の女性はピアノ教師だろう。全体としては抑えた色彩と形を使っているので、静かな午後という雰囲気が画面から滲み出ている。
「この絵じゃないけど、私、子供の頃よく少女がピアノを弾いている夢を見たわ。きれいなドレスを着

せてもらった小さな女の子が、足がようやく届くような大きなピアノの鍵盤を叩いているの」
間宮由美は遠くを見つめるような目付きをした。
「夢では、少女や少年といった子供は、自分自身を表わすと、いわれているんだ。ピアノは女性か女性自身の象徴となる。つまり少女がピアノを弾く夢は、自分に対する自己愛や孤独感の顕れと解釈されるらしいね」
「フロイト流の精神分析なの？」
「まあ、似たようなもんだ」私は由美の目を覗き込んでニッコリ笑った。
「私が八つの時に、両親が交通事故で亡くなって、それからは姉の手ひとつで育てられたの。父が残してくれた遺産がある程度あったので、生活には困らなかったけど、やっぱりとてもさみしかったわ」
「他に肉親とか親戚とかは？」
「この国のアイダホに叔母がひとりいたの。旦那さんはアメリカ人で、大きな農場を経営しているんだけど、少しの間日本に勉強しに来ていたことがあったの。その時知り合って、身ひとつでやって来たらしいのよ。その叔母というのがよくできた人で、私達のことを大変心配してくれて、是非こちらへ来て一緒に暮らすように勧められたの。でも、急にそんなことを言われても、遠い異国だし、友達と別れるのも辛いし、ということで、結局姉とふたりで日本に残ることに決めたわけ」
「それじゃあ、今回アメリカに来たのも、その叔母さんに会うのが一つの目的なの？」
「叔母は、三ヵ月前にガンで死んでしまったわ。そのお墓参りも兼ねてやって来たのよ。叔母は毎年一度は、日本へ帰って来て、いっぱいプレゼントをしてくれてね」
間宮由美の顔が曇った。目が少し潤んでいる。
「ごめん、悲しいことを思いださせてしまったみたいだ」
彼女は首を振ると、「ううん、こちらこそ、ごめ

んなさい。よけいな心配させちゃって」
「お姉さんとは、どれくらい年が離れているんだい？」
「七歳よ。父と母が死んでしまった時、姉はまだ高校生だった。でも、姉は私の母親がわりになって、何から何までやってくれた。炊事から洗濯まで、普通の母親だって、あんなに働かないだろうと思うぐらいに、よくしてもらったわ」
「いいお姉さんなんだ」
私の頭の中で、見知らぬ彼女の姉の穏やかな微笑が形づくられた。
「でも、そのために姉は行きたかった大学にも進まなかった。それに何といってもその時は姉もまだ十代の少女よ。きっと寂しかったのにちがいないわ。私には甘えられる姉がいたけど、姉には誰もいなかったんですもの。いつだったか、姉はベッドの中で、私に気づかれないように、声を殺して泣いていたわ。その時、私は胸が潰れるように悲しかった」
間宮由美は、そのか細い指を目頭にもってゆくと目をふせた。
「いまお姉さんはどうしているの？」
私には、こんな言葉しか掛けられなかった。
「私が二十歳になった時、お嫁にいったわ。とても奇麗だった。だから、私は三年前からひとりぼっち……」
間宮由美は、ふざけて笑った。しかし、その笑いの最後の表情は泣き顔に見えた。
私は、「きみにはぼくがいるじゃないか」というような、お定まりの台詞でも言いたかったが、さっき識り合ったばかりだから、と、それは控えた。
「きっといいことがあるさ。今度はきみが幸せになる番だ。こんな話を聴いたからには、お姉さんにもきみにも是非とも幸せになって欲しい」
「ありがとう。平田さんて、やさしいのね」
間宮由美は、うれしそうに微笑んだ。
私達は打ち解けた気持ちになり、幼い少年と少女

のように手を繋いで二階の絵画を見て回った。
しばらくして、私達は一階のカフェテリアに入った。昼食時間を少し過ぎていたので、あまり人はいなかった。
私はコーヒーとサンドウィッチ、由美はオレンジ・ジュースとサラダを持って、窓際の席に腰を落ち着かせた。
ここからは、彫刻と緑を配した内庭を見ることができ、美術ファンに一時の憩いを与えてくれる。
「ねえ、平田さんは心理学者だということだけど、一体どんな研究をなさっているの？」
由美が、ラシューズの『立っている女』から、私に視線を移しながら尋ねた。
「まったくの無名だけどね。ぼくが心理学者だということを、本人以外は知らないんじゃないかな？」
「まあ、冗談を――」
「本当さ。いま研究しているのは、大脳の働きの活性化と、マインド・コントロール（意識操作）」
「大脳の働きの活性化の研究というと、人間の才能とか能力を高めるものと思っていいわけ？」
「だいたい、そんなところだ。脳は、よく氷山に譬えられるね。つまり、脳の覚醒している部分は氷山の海面上に出ているところで、眠っている部分は海に沈んでいるところであると。ぼくらの意識と潜在意識も同じなんだ。確かに、ぼくらが使って物を考えたりしているのは大脳の一部でね。だから、眠っている部分を働かせて、潜在的な才能や能力を精一杯引き出そうというわけだ」
「ふーん、具体的には、その天才を作るためにはどうするの？」
「やはり化学薬品とか超音波や電波とかを使うんだけどね。大脳には約百四十億の脳細胞があると言われている。その脳細胞に薬品による化学変化、ある種の電気による物理変化などを与えて、働きを活発にさせるんだ。たとえば、神経伝達物質といわれるものに、アセチルコリン、ノルアドレナリン、ドー

パミン、セロトニンといった物質がある。この脳内物質の中には、知能を高めたり記憶をよくしたりするものがあることがわかっている。だから、いまぼく達がキーポイントとして研究しているのが、これらの物質の仕組と働きなんだ」

「つまり、ホウレン草を食べれば頭がよくなるとか、鍼やお灸で人体のあるつぼを刺激すれば記憶力が良くなるとかいったことを、もっと科学的に研究しているのね？」

「簡単に言えば、そういうことになる」

私はサンドウィッチを口に運びながら頷いた。

「もし、その研究が成功すれば、精神薄弱者や知恵遅れの子供にとってはいいニュースね」

私は由美のやさしさにあらためてひかれていく自分を感じていた。

「もうひとつの、マインド・コントロールって、催眠術かなにかなの？」

由美がフォークでサラダをつつきながら訊いた。

「そうだよ。でも、催眠といっても、マンツーマンのごく初歩的なものから電子装置を使う高度なものまであるからね」

「現代の科学では、マインド・コントロールによってどの程度まで人間を自由に操ることができるの？」

「どんなことでも、お好み次第さ」

私は、いとも簡単に答えた。

「どんなことでも？」

由美は驚いた声で訊き返した。

「そう、どんなことでもさ」

「でも、盗みや殺人なんかはさせることができないんじゃなかったかしら。いつか、そんな話を聞いたことがあるわ」

「確かに、そう言われていた時代もあった。いくら深い催眠状態（トランス）に陥っている人間でも自分の潜在意識にないことや潜在意識に抑圧されていることは命令があっても行わない、とよく言われた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com